

はじめに

1995 1.17

阪神・淡路大震災から30年という大きな節目を迎えました。6,400名を超える尊い命を失った未曾有の災害を決して忘れることなく、犠牲者の御霊に深く哀悼の意を捧げます。復旧・復興に尽力された方々、全国・世界から寄せられた数々の温かいご支援に心から感謝申し上げます。

震災直後、瓦礫の中で助け合った人々の姿、全国から駆けつけたボランティアの方々の献身的な活動は、私たちに「ともに生きる」ことの意味を教えてくださいました。兵庫はその絆を力に、災害前よりもよりよい社会をつくろうと、新しいまちづくりに一丸となって挑んできました。この「創造的復興」の理念は、2015年の国連防災世界会議で採択された仙台防災枠組に盛り込まれ、今日では世界の防災・復興の基本理念として共有されています。

国内各地で数々の大災害が発生するたびに、人々は大きな悲しみから立ち上がり、その経験や教訓のバトンを次なる災害への備えとして繋いできました。一昨年の能登半島地震など、阪神・淡路大震災以降の地震災害においても、復興に向けた連帯と分かち合いによる支援の輪が着実に広がりを見せています。

一方で、震災の記憶は年々風化し、震災を知らない世代が増えています。南海トラフ地震や豪雨災害など、新たなリスクも顕在化しています。こうしたなか、兵庫県では令和6年11月から1年間、「うすれない記憶はない。つなぐべき決意がある。」というキャッチフレーズのもと「阪神・淡路大震災30年事業」を展開し、県民、企業、行政、NPOの皆様とともに、震災の記憶を未来へつなぐ取組を進めてきました。

昨年1月17日の「ひょうご安全の日」に、天皇皇后両陛下にもご臨席いただき開催した「1.17のつどいー阪神・淡路大震災30年追悼式典ー」では、若い世代が自らの言葉で防災についての学びを伝える姿から、安全で安心な社会づくりへの決意を新たにする機会となりました。

また、9月には大阪・関西万博のテーマとシンクロして取り組む「ひょうご EXPO week」の一環として、「災害からの創造的復興ウィーク」を設定し、様々なイベントを集中的に実施しました。なかでも、国内外の被災自治体や関係機関が一堂に会した「創造的復興サミット」では、各被災地に共通する創造的復興の理念を「ひょうご宣言」として世界に発信し、未来に向けた力強い一歩をともに踏み出すことができました。

さらに、国際防災関係機関等による国際フォーラムや、減災社会の実現を目指すシンポジウムなど、県内各地で実施した阪神・淡路大震災30年記念事業は170以上にのぼります。

災害はいつ、どこで起こるかわかりません。だからこそ、一人ひとりがリスクを正しく認識し、備えを怠らないことが大切です。兵庫はこれからも、震災の経験と教訓を国内外に広く共有し、命を守る社会づくりを進めます。

30年の節目にあたり、震災の記憶を決して風化させず、教訓を生かし、命を守る社会を次世代へつなぐ歩みを、ともに進めてまいりましょう。

令和8年3月

ひょうご安全の日推進県民会議会長

兵庫県知事 齋藤元彦

